

# ネラ・ラーセンの『パッシング』

——黒人の責務と私的行動——（II）

安部大成

まえがき

- 1 『パッシング』に登場する二人の女性  
——クレア・ケンドリーとアイリーン・レッドフィールド——
- 2 「パッシング」に対する二人の見解  
——クレア・ケンドリーとアイリーン・レッドフィールド——
- 3 アイリーンの「パッシング」体験と白人社会の人種偏見  
……（以上前号）
- 4 作者ネラ・ラーセンが『パッシング』で提示した問題
  - a 「パッシング」と黒人社会
  - b クレア・ケンドリーの行動
  - c アイリーン・レッドフィールドの重荷

## 4 作者ネラ・ラーセンが『パッシング』で提示した問題

### a 「パッシング」と黒人社会

アイリーンが本意ながら、クレアに協力して、ベロウ家に「パッシング」して入り込むことになったのは、前章「アイリーンの『パッシング』体験と白人社会の人種偏見」で述べたように、アイリーンの側に「パッシング」している人に対して、事の是非を決しかねる、曖昧な態度、言わばアンビヴァレントな態度が存在するからであった。特に相手がかつて親密な関係にあった場合はそれが著しく現われると見てよい。

否定と肯定との二つの面に分けて、「パッシング」に対するこの態度を分解すると次の表が出来る。

A 否定的態度	1 非難する。	2 軽蔑の念を催す。	3 異様な反感を覚えて避ける。
B 肯定的態度	1 容赦する。	2 感服する。	3 保護する。

このような二律背反的な態度が生じるのは、白・黒両人種関係の中で形成されたところの、黒人社会特有の価値規範に由来すると考えられる。

黒人社会学者ロバート・スティブルズはその著『黒人社会学序説』において、白人社会のそれとは著しく異なった四つの価値規範を取り上げ、説明を加えているので、これを要約し列挙してみよう<sup>1)</sup>。

#### 1 相互扶助

アングロ-サクソン文化は個人主義と競争を価値規範とするが、黒人達は困った事態に置かれた人びとをまず援助すべきであると考える傾向にある。彼等は競争の精神よりも協同のそれの方が正しいと確信している。

#### 2 他者に対する思いやり

他者の苦痛、またはその苦痛の原因となるものを、どうにかして取り除いてやろうという、深い共感の存在は黒人文化を特徴づけるものである。これは自らが社会的抑圧を被る中で形成されたところの情感と考えられる。

#### 3 適応能力

黒人に対して基本的に敵対的な社会で、死なずに生きて行く能力が重要である。対立する人種関係の中であって、変転する難局に対処するために、敵対する白人に対して、言い抜けたり、本心を見せないで対応したり、また事実を意図的に隠したりする技能もこの能力に含まれる。

#### 4 黒人集団に対する忠誠

黒人達はその仲間の黒人との間で生ずる意見の不一致がいかなるものであれ、黒人達の共通目的のためには、意見の相違を越えて、結束して立ち上るべきだと信じている。仲間の黒人が白人達と対決する時には、是が非でもこれを支援すべきであると考えている。

さて、この四つの価値規範を念頭に「パッシング」に対する肯・否の態度を考え、それがアイリーンが代弁するようなアンビヴァレントな態度へ傾斜する要因となる点に着目してみよう。

「パッシング」に対する否定的態度が生じるのは集団の立場から見ればこれが第一に個人主義的行為である点であろう。また、次節「クレア・ケンドリーの行動」において見る如く、利己主義の一典型とも思われるような様相を見せるためであろう。

コックスの定義にある如く、「有力人種集団の身体特徴を持つ混血の人」だけが、その集団の「社会的利益の分け前にあずかることを目的に、完全にその集団の一員になる」のが「パッシング」なのだ。

ラングストン・ヒューズの短編『パッシング』(1934年)に描かれたジャックは白人社会の一員となり、安定した職と高収入を得るが、同じ年頃の黒人青年は職が見つからず、彼の営業所の室外で、雑役をする以外にない。ジャックの母と弟妹は肌色が濃くて「パッシング」できないから、不利な社会条件の中に置かれている。

個人主義、あるいは利己主義の外に、「パッシング」は黒人に対して敵対的である人種集団に加わる行為である。これは明らかに、価値規範の4「黒人集団に対する忠誠」にそむく行為と言える。

ウォルター・ホワイトは「パッシング」した人びとについて、次のように言う。

「彼等は一体何者であろう。大抵の人びとはそれほど重要な人物ではない

が、中には著名人達がいる、そこには数名の国会議員、二、三の作家が含まれており、また何人かの人物は『黒人と他の少数派集団に属する人達をそれ相応の地位に抑え込む』ことを目的とする運動を組織化すべく活動しているのだ。』<sup>2)</sup>

チェスナットは「パッシング」をどのように見るのであろうか。  
彼はこの行為を道義上、積極的に弁護できるのは、

「その黒人とその子供達が白人になることによってのみ、市民としての権利と尊厳を享受し得る場合に限られる。」<sup>3)</sup>

と条件を付けている。

「パッシング」は黒人の四つの価値規範のうち、1「相互扶助」、2「他者に対する思いやり」、4「黒人集団に対する忠誠」の三つにもとる行為と言えるようである。

では「パッシング」に対する肯定的な態度を生ぜしめる価値規範は、残る唯一つのもの、3「適応能力」ということになるだろう。

「パッシング」をこの観点からとらえるのがラングストン・ヒューズである。

彼はこの行為を微塵も非難しないどころか人種差別社会を生き抜く方法の一つとして肯定し、これを愉快にさえ感じている。彼はこの行為の正当性を平易な表現で主張する。

「アメリカでは極めて多くの黒人が毎日人種偏見という菓子パンの余分なところを巧みに削り取って、利用に供している。彼等白人達が我々黒人に対して行う振るまいに道徳的感覚が欠けている以上、殆どの黒人達は偏見に囚われている白人達を騙し、出し抜いてしかるべきだ、と思っている。」<sup>4)</sup>

ここに譬えとして出て来る「菓子パン」についてはヒューズが前もって説明しているが、奴隷伝承の中の民話に出て来るもので、黒人召使達には決して菓子パンを食べさせない、と言う偏狭な、大農園の女主人の話である。この女性は、黒人の料理人が作る菓子パンにわざわざ女主人である自分の手でナイフを入れ、召使達が食べると直ぐ分かるように、切った数を勘定しておくのである。

調理用の材料が有り余る大邸宅の台所で、一口の菓子パンすらけちる女主人の、黒人召使達に対する浅ましい、偏狭な振るまいを出し抜くために、料理人は決まった数の菓子パンを練り上げた後、それぞれの端を僅かずつちぎり取って、別に一個の菓子パンを作り、召使達もこれを常食にするようにした。

女主人はこれに気付かず、相変らず菓子パンは彼女自らナイフを入れ、その数を勘定し続けたことは言うまでもない。

ヒューズは「パシング」型1から型5までのすべてを、差別する者また偏見の持主を騙し、出し抜く上で、大変便利な方法と見なしており、この行為を愉快がっているようである。

「パシング」型5をケイトンおよびドレイクが「社会学的自殺」を遂げる行為と説明し、チェスナットが道義的弁護に条件をつけるのに対して、彼はこれを「危険を伴うゲーム」に過ぎないと見る。

「或る者は緊張に耐え難く、再び元に戻って来るか、精神的に参ってしまう。しかし、他の多くの者が快活に三代、四世代へと『パシング』していった、黒人の形跡を全くなくしてしまう。」<sup>5)</sup>

彼は黒人のある著名な教育学者が彼に話した「パシング」型5の例を愉快に紹介している。この教育者は彼が教えた、頭のいい黒人学生を尋ねていたところ、この青年が白人に成り済まして、中西部のある大きな、豊か

な白人教会の牧師になり、白人信徒に教えを説き、これを導いていることが判明した。

「この教育者は教え子が我々のなじみの白人達を騙して、牧師として成功したことをとても喜んでいた。」<sup>6)</sup>

ここでヒューズが「白人を騙す」と言っている意味は人種偏見に囚われて、黒人を差別する白人のその「差別的側面を騙す」ことであって、視点は人間関係にはなく、差別が貫徹するところの人種関係に置かれている。

差別の立場から、黒人と平等な関係を一切排除しようと試みる白人は、白人と見分けのつかない黒人が白人集団の中に入り込むのを警戒する。

「白人に取って、パッシングは侮辱であり、社会的または人種的に危険なものである。」<sup>7)</sup>

とミュルダールは「パッシング」に対する白人側の社会的現実と見方を指摘している。「侮辱」とは黒人に出し抜かれること、「社会的危険」とは黒人と平等な社会関係が成立することによって人種的優越が壊されること、そして「人種的危険」とは社会的平等がもたらす人種間結婚によって人種的純潔が失われることを言う。まさに差別者の屈辱と危機なのだ。このような連中は「騙し」、「出し抜く」方が手っ取り早い、とヒューズは言うのだ。

「まえがき」でミュルダールの「パッシング」の定義を掲げたが、これも白人側から見たものと言える。その色彩の強いところに留意すべく、範囲を限って再度引用すると、

「“パッシング”とは……白人達を騙すことと、そのことを知っているであろうところの黒人側が共謀して秘密にすることによってのみ達成でき

る。』<sup>8)</sup>

黒人側でも、「パッシング」を実践する人びとやヒューズのようにこれを積極的に支持する立場にある人からすれば、これは白人集団の差別と偏見を出し抜く行為の一つであり、これを行うのは有意義であると判断しており、他方、差別と偏見を有する白人側では「パッシング」を警戒する。彼等白人は、この行為は個人が集団を抜け出して、秘密の裡に白人集団内に入り込むものであるから、黒人集団の暗黙の協力、即ち白人を騙すために集団的「共謀」があると判断する。

さて、個人主義的、利己主義的であるために、黒人の価値規範の1「相互扶助」、2「他者に対する思いやり」の二つに反し、また敵対する白人集団の一員になるがゆえに4の「黒人集団に対する忠誠」に反し、裏切行為に相当するところから黒人達の間で否定的態度をもたらす「パッシング」も、差別を出し抜く観点から、3の「適応能力」の面で、これを強く支援する精神的基盤が存在し、ヒューズに代表されるような肯定的態度が生成される。そしてそれは当然黒人集団の支持を受けることになる。「仲間の黒人が白人達と対決する時には、是が非でもこれを支援すべきである」とする4の「黒人集団に対する忠誠」がそこに働くからである。

「パッシング」に対して働く、アイリーンの二律背反的な情感と対応は、相手が幼少の頃からの親友であったことがそれを強める要素となっているのであろうが、黒人一般のものと見て差し支えあるまい。「パッシング」も抽象の次元では是非を論じ得ても、具体化すると、アイリーンの態度が生じるのも不自然ではない。

「パッシング」に対する黒人社会の対応をこの社会の価値規範との関係で見ると、ラーセンのこの作品において考慮すべきもう一つの問題がある。

それはアイリーンの夫ブライアンが「パッシング」して行った人びとについて

て、妻に言った言葉に反映されている。

「彼等は常に戻って来るんだよ。私はそうなるのをしょっちゅう見て来たんだよ。」<sup>9)</sup>

彼はそう言って、妻に「バッシング」し切れないで戻って来た旧友の例を想起させる。

黒人集団は「バッシング」を放棄したり、失敗したりして、再び集団に帰属することになる人びとを包括して来ているのである。まさに「バッシング」は「容赦」され、「保護」されるのである。

チェスナットの『ヒマラヤ杉の蔭の家』ではジョン・ワーウィックが10年後、夕闇に紛れて、僅かな時間だったが、母と妹に会いに戻って来る。彼は商用で訪れた、生涯捨て去った筈の故郷の町で、何気なくその後をつけて行った美しい女性の帰り着いた所が、かつての我が家であったことから、懐かしさに抗し切れず、夕暮を待って戸を叩いたのであった。その時、白人社会に連れ出した妹レナは1年余り経って、実業家でジョンの親友であるジョージ・トライオンと婚約するが、病床の母を見舞いに密かに戻って、故郷の町でジョージに遭遇し、「バッシング」が破綻、それによって兄のジョンの身の上も明らかになる。二人は結局は白人社会での孤独な生き方に耐え難かったのだ。

ヒューズの短編『バッシング』のジャックは白人集団の一員となり、ドイツ系アメリカ人と婚約している。白人達と暮らして、彼が最も苦しいのは、彼等の黒人に対する悪質な偏見であるようだ。この見方が黒人を差別の下に置くのだと、彼は実感する。局留にした母宛の手紙で彼は言う。

「彼等は時々脱線して、黒人達はみんな泥棒で嘘つきか、さもなくば肺病

や淋病のような病を患っている、と悪いことばかり言うのです。こんな出鱈目が言い触らされているのは、黒人が真面目な仕事につくのが難しい筈です。私は「パッシング」をやり始めて、彼等が話すことを耳にし、また一緒に暮らすようになるまで、彼等がいつも、あんなに酷いことを言っているとは思っても及びませんでした。」<sup>10)</sup>

人種偏見による黒人侮辱を前に沈黙し、時には不本意ながら迎合を装うのも耐え難いものになる日も来るかも知れない。先に述べた如く、「或る者は緊張に耐え難く、再び元に戻って来るか、精神的に参ってしまう。」とヒューズも言うのだ。

さて、ここで、その個人主義的、時には利己主義的であるゆえに、これに対して否定的態度を生成せしめる行為であっても、また、敵対する集団の中に潜入して、差別を出し抜き、目的を達せんとする点で「適応能力」の面で評価される「パッシング」が、理由は何であれ、その敗北によって、再度黒人集団に戻って来る羽目に陥っても、これを「容赦」し、「保護」するところの黒人集団の価値規範に注目しておきたい。

〔注〕

- 1) Robert Staples, *Introduction to Black Sociology* (McGraw-Hill Book Company, 1976), pp. 76, 77.
- 2) Walter White, *A Man Called White* (Arno Press and The New York Times, 1969), p. 4.
- 3) Charles W. Chesnutt, "The Future American; Complete Race Amalgamation Likely to Occur," Boston Transcript, Sept. 1, 1900, p. 24. Sylvia Lyons Render quot. *Charles W. Chesnutt* (Twayne Publishers, 1980), p. 80.
- 4) Langston Hughes, "Fooling Our White Folks," Darwin T. Turner ed., *Black American Literature Essays* (Charles E. Merrill Publishing Company, 1969), p. 82.
- 5) 6) Langston Hughes, *op. cit.*, p. 83.
- 7) Gunner Myrdal, *American Dilemma*, Vol. II (Pantheon Books, 1972), p. 687.
- 8) *Ibid.*, p. 683.

- 9) Nella Larsen, *Passing* (Arno Press and The New York Times, 1967), p. 96.  
10) Langston Hughes, *op. cit.*, p. 50.

## b クレア・ケンドリーの行動

クレアは12年ぶりに偶然再会したアイリーンをシカゴの自宅に招いた後、夫と共に彼の仕事先であるヨーロッパに向かった。

その時、彼女はアイリーンに次のような手紙を送った。

「……今のような事情の下にある私が、あなたの来訪を求めたり、と言うよりも、強いたりすべきではなかった、とあなたはお考えでしょう。しかし、あなたにお会いして、どんなに嬉しく、胸がわくわくする程幸せであったか、また、あなた以外の人にも会いたい（それは適わぬことでしたが、どの人にも会いたい）と、どれ程思ったことか、お分かり頂けたら、私があなたにまたお会いしたいと願っていることも御理解頂けるでしょうし、少しは私を御許し下さると存じます。……」<sup>1)</sup>

そして、追伸には次のように認めた。

「愛しいリーン、あなたの生き方が恐らくずっと賢明で、遥かに幸せかも知れませんが、唯そう思えるのです。今のところ確信はありません。少なくとも、これまでのような確信はありません。」<sup>2)</sup>

クレアの手紙には彼女の性格の際立った特徴が現われている。

彼女は人の心情に巧みに訴え、その人にうまく義務を感じさせることによって、自己の利益を計る、あるいは自己の主張を通すタイプの人物であるようだ。

この手紙で彼女は a, b 二つのことを主張し、これを受け入れるよう要求

している。そして、そうしてもらふことの理由まで述べている。

- a. 再会の願いを持っていることを理解してもらいたい。
- b. 来訪を無理強いて、つまり「バシング」を無理強いて、それによってアイリーンに黒人侮辱を甘受させる結果になったことを、少しは許してもらいたい。

その理由は、訣別した人種集団の内の親しかった人に出会った喜びが自分の側にある。つまり、再会による自分の感情的満足は訣別した集団との感情的繋がりが存続する証拠であり、このことは訣別された側も評価し、喜ぶのが当然だ、と考えられるからである。

このように押しの強い性格のクレアであるが、夫が頑迷な人種差別者であることが判明して、万一にも生じかねない身の危険を思うと、これまで「バシング」して来た12年間のゆるぎない自信に陰りが見え始めたようである。それは追伸に現われている。

- a. アイリーンの生き方に対して言えば、自分のそれよりも賢明で、幸福かも知れない。
- b. 自分の生き方には今までのような確信が持てなくなった。

と述べている。

それから2年余り経って、クレアは夫の商用の都合で、再びアメリカを訪れ、半年ばかりニューヨーク市に居を構えることになる。アイリーンの嫁ぎ先が、ペロウ夫人としての理解では「マンハッタンの医者ブライアン」であることを知っている彼女は、ハーレムのアイリーンの住所を捜し当て、手紙を出す。

「……私は寂しくて、非常に寂しくて……これまでに、私は思い焦がれることなど、何一つなかったのですが、あなたともう一度一緒に居たい、という思いに焦がれてどうしようもありません。……私が灰色の人生を送る中で、自分ではそこを逃れ出てよかった、と一度は思った昔の世界の生き生きとした情景をどれ程心に思いつつ暮らしているか、あなたにはお分かりにならない筈です。……それは疼きのようなもの、決して鎮まることのない痛みのようなものなのです。……」<sup>3)</sup>

この手紙は次のように結ばれていた。

「それもあなたが悪いのよ、愛しいリーン、少なくともその一部はね。私があの時シカゴであなたに会わなかったら、恐らく、今頃、こんな酷い、無謀な願いを抱くことにはならなかった筈ですもの……」<sup>4)</sup>

2年前、これまで程、自分の生き方に自信がなくなった、と書いたクレアは今では「灰色の人生を送」っており、「寂しくて、非常に寂しく」て仕様がな、と訴えるに至った。

彼女は寂しくなった原因を文面には記していない。それは万一手紙がアイリーンの手に届かない場合、または夫の目に触れた場合に備えて、彼女と黒人との繋がりを想定させるようなことは用心深く避けているからであり、またこのことは2年前の手紙についても言えるが、寂しさの原因は最愛の夫が度し難い黒人差別者であることを、アイリーンと再会した正にその日に思い知らされて、それによって夫との心の絆が切れたことにあるようだ。

夫との心の絆はクレアに取っては、取りも直さず、白人社会、即ち、白人集団と彼女とを結ぶ人間関係の基でもあったのであろう。それが切れたことによって、彼女は白人社会から遊離してしまった、と見ることができる。

だから、彼女は黒人の世界に住むアイリーンと「もう一度一緒に居たい、

という思いに焦がれ、「そこを逃れ出てよかった、と一度は思った昔の世界」、黒人社会の「生き生きとした」生活の「情景を……心に思いつつ暮らすことになってしまったのだ。

このような心の状態にあるクレアと夫との関係はどのようなものであろうか。

夫のペロウは妻が「パシング」しているのを知らないから、彼が妻に言った言葉が彼女に精神的ショックを与えたとは思ってもよらない。だから、彼の側に立って考えると、二人の関係、夫婦関係を通しての人間関係は以前と変りはない。

クレアの側からすれば、夫との人間関係は形骸化しており、その虚ろな部分を占めるのは「パシング」者としての自己であり、夫ペロウに対して存在する関係は人間関係ではなく、人種関係と呼んでいい。これは白人であるペロウに対する黒人であるクレアとの関係であるから、クレアをして、夫および白人社会から、益々遊離せしめ、孤立させることになる。

こうなると、彼女が黒人として、アイリーンと、またアイリーンを通して、かつての帰属集団との人間関係の回復を求めるに至るのは自然の成り行きと言える。

さて、「心の絆」と「パシング」とはクレアにはどうかかわっていたのであろうか。彼女はアイリーンとドレイトン屋上レストランで偶然再会した時、アイリーンが聞きたがっているであろう、とその気持を読み取って「パシング」者の心境を語ったところは、2章の『「パシング」に対する二人の見解』で述べたが、彼女は、「パシング」するには、ちょっとした度胸があればいい、また、黒人の血を引く事実を否認するには、自分は相手をうまく出し抜くだけの才能を十分持ち合わせている、と事もなげに語っていた。彼女はおよそ10年を越える「パシング」体験を基に、自信を持って語ったのであった。

元来、彼女の場合は、「パシング」を意図したのでなく、事の成り行きに

よって、そうなってしまったのである。ベロウと相愛の仲になり、叔母の家庭から逃れ出て、結婚し、白人社会に溶け込んでしまったのだ。「バシング」が深い心配事となって、彼女の生活の前面に立ち現われたのは、唯の一度だけで、娘マージャリー出産の時であった。これは無事に済み、その後何一つ気に掛かるものはなく、アイリーンとの12年振りの再会となったわけである。その日、別れに際して、彼女がアイリーンに来訪を強く求めたのは、ヨーロッパから久し振りに帰国して、旧友に郷愁の入り交じった懐かしさを感じたからであって、そこには「バシング」がもたらす孤独な寂しさなど微塵もなかった筈である。

彼女がそれ程気にも留める必要のなかった「バシング」が彼女の生活の前面に立ち現われるに至ったのは、3章で述べた如く、彼女がアイリーンに再会した数日後のことである。彼女は旧友の見守る中で、計らずも夫ベロウが夫婦の絆などいとも簡単に断ち切るであろう、頑迷で、冷たい人種差別者であることを知ったのであった。

白人すべてが人種差別者であるのではない。また、差別や偏見にも程度と質において相違がある。だから、彼女は夫が偏見のない、開明的な人であることを願っていたであろうし、現実的には、人種差別の存在する社会に育った白人である以上、夫にある程度の人種偏見を予想していたかも知れない。しかし、それも克服し得る筈だ、と二人のこれまでの親密な人間関係の絆を基に期待していたのだ。だから、彼女は夫に言ったのだ。

「……こんなに長く一緒に暮らして来たのですもの、私が1,2パーセント程度黒人であっても、何の変りもないじゃありませんか?」<sup>5)</sup>

夫ベロウは妻クレアに、そんなことは通用しない、と冷酷に拒絶したのであった。彼女が「バシング」する上で依存していたのは、彼女がアイリーンにさり気なく語ったような、単なる適応能力ではなかったと言えよう。

彼女は夫がある程度開明的であり得ると判断し、その開明性と相互の愛情に、それとなく依存して来たようである。彼女はそれが幻想であったことを知ったのだ。

クレアはアイリーンに白人社会での寂しさを、そのもとになった2年前の出来事を暗示しながら訴えたが、追伸には、前回の手紙に見られる以上に強い形で、アイリーンに対して自己主張を行っている。それはアイリーンも旧友としてよく知っているように、クレアの性格に由来するのであろうが、それだけに止まらず、そこには何かの企てが感じられる程執拗である。この追伸では、自分を苦境に追いやった原因にアイリーンも関与したのだから、責任の一部を感じて、為すべき一定の義務を果たして欲しい、と求めているようである。

彼女はアイリーンから返事を得ることを当然視するかの如く、局留を指示している。

アイリーンから返事が来ないと見るや、彼女は夫がフロリダ州へ出張した留守を利用して、こっそりと、ハーレムにアイリーンを訪ねて行く。

招かれもしないのに一方的に訪ねた理由は、手紙に返事がないので、出した手紙が誰か他の人の手に渡ってしまったのか、心配になって訪ねて来たのだ、と言う。そういう理由もあったであろうが、実際はアイリーンのところに入り込むのが目的で訪ねて来たのである。

「パシング」している者がハーレムに人を訪ねて来るなんて、危険極まりない、と忠告され、アイリーンに拒絶されそうになると、彼女はすかさず、訴える。

「一部はあのことなのよ。あのことが白人でない人達に会いたくさせたのよ。あれが一挙にあらゆるものを一変させたのよ。あんなことがなかったら、あなた方、誰にも会うことなどせず、最後まで向こう側に行った儘

で済んだでしょうに。でもね、あのことで、私は変になって、それ以来、とっても寂しくなったのよ！ あなたには分からないわ。誰一人として親身になれる人がいないのよ、本心で話せる人が。」<sup>6)</sup>

この言葉がアイリーンの心を打ち、クレアはレッドフィールド家に入り込むことに成功する。そしてその日の夜、黒人福祉連盟主催のダンス・パーティが行われるのを知ると、招待してくれるよう懇願する。

黒人のダンス・パーティに加わることによって生ずる「パッシング」露呈の危険性、愛娘マージャリーとの離別を招く恐れなどを指摘されて、拒否されると、クレアは訴える。

「私はね、黒人達に出会いたい、一緒に居たい、話し合いたい、そしてね、みんなが笑う声を聞きたいの。どんなにそれを願っているのか、あなたには分からないのよ。」<sup>7)</sup>

そして、この懇願が十分な効果をもたらさないと直感すると、招待しないなら出掛けて行って勝手に参加する、とまで言い張り、結局その望みを遂げる。

彼女はアイリーンの夫ブライアンと連れ立つように、進んでパーティに出席し、黒人上流社会の夜を楽しむことになるのだが、これを契機にレッドフィールド家を頻繁に訪れるようになり、ブライアンに積極的に近づき、黒人社交界に出入りするようになる。そして、夫ベロウが商用でニューヨーク市を離れるたびに、レッドフィールド家を訪ねて来るようになり、アイリーンを通して交際を広げ、その間に、アイリーンの夫、ブライアンと急速に懇意になり、アイリーンの悩みの種となる。

このクレアの行動を「パッシング」と私的行動の関係から見ると、どのような意味を持つのであろうか。

これについて述べる前に、何故「パシング」と私的行動であって、個人的行動でないのか、説明する必要がある。

ここで使用している「パシング」という用語は当初述べたように、白人社会で得た経済的・社会的利益を黒人社会に持ち帰る、つまり、黒人集団の利益になる「パシング」＝「シャトリング」、または職業的「パシング」とは全く区別されるものであって、それは白人社会に生活基盤を置き、黒人集団と絶縁することによって、白人として、経済的・社会的に当人だけの利益を計るものであるから、集団との関係でこれを見なくても、「パシング」それ自体が本来、個人的・利己的なものである。従って、これを行動面と言うなら、それは個人的行動である。

ところが、この個人的行動は黒人集団との関係においては、黒人集団と訣別して白人集団の一員になった時に、その行動は完了するから、実体としては消滅する。

「パシング」が行動として、個人的・利己的である点で問題になるのは、それが可能な人がこれを実行に移す前の段階において、あるいは第三者から見の場合においてである。

この小説の人物で言えば、アイリーンやブライアンに取っては、それは個人的・利己的行動として問題になるが、クレアには、それは完了してしまっているので、問題として存在しない。

ところが、「パシング」して行ってしまった人には、全く新たな問題が生ずる。それは、その人が「パシング」して来たところの白人集団の中で、一人孤独に、密かに取り組まねばならない問題である。それは当人の内面、つまり心に生ずる問題なのである。それを当人が白人になりきる過程で生ずるところの、様々な内的葛藤と呼んでもいい。要は誰も立ち入ることの出来ない心の領域、一個人の私的自由の領域に生ずる問題である。そこで、私的行動と言う場合、それは必ずしも行動を伴うとは限らないが、この内面的問題、言い換えれば、私的問題を基に展開される行動を言う。

クレアの私的問題はこれまでに二つあった。一つは出産前の心配に現われた。もう一つはアイリーン宛の二通の手紙に用心深く述べられ、また彼女を訪ねて訴えた言葉に現われている。クレアはアイリーンに訴えたところの私的問題をクレア流に解決すべく行動を取ったのである。

その行動とは、夫の差別性を積極的に出し抜くことによって、彼の差別性を無能化し、無効にすることなのである。

彼女は黒人との接触を断って、「パッシング」した十数年後、夫の差別性を出し抜くために、黒人との接触を深める一方、「パッシング」も維持するという矛盾をはらんだ、リスクの多い、狭い道を選んだのである。

「パッシング」を維持するには当然のこと、行動が制約される。これに苛立った時にクレアが見せる、ペロウに対する激しい憤りはアイリーンを驚かさすほど激しい。

「ジャックの糞ったれ！ あいつ、私にしたいことを何一つさせないで！ 殺してやりたい！ 何時かやってやるから。」<sup>8)</sup>

彼女は黒人集団との接触を深め、彼女の人生の初期を育んだ人間味の濃い文化にひたるようになると、「パッシング」が露呈した場合の覚悟も固まって来る。夫と離縁し、それと共に愛娘を失うことにもなるが、彼女は黒人の街ハーレムに移り住む考えでいる。その覚悟で、クレアは出来る限り積極的に、己の適応能力を発揮して、夫ペロウをでなく、夫の差別面を出し抜くことにしたのである。

クレアの強引にも、また老獪にも見えるアイリーンへの接触には、秘められた別の目的があったのである。

〔注〕

1) 2) Nella Larsen, *Passing* (Arno Press and The New York Times, 1969), p. 82.

- 3) 4) *Ibid.*, p. 8.
- 5) *Ibid.*, p. 68.
- 6) *Ibid.*, p. 119.
- 7) *Ibid.*, p. 129.
- 8) *Ibid.*, p. 128.

### c アイリーン・レッドフィールドの重荷

アイリーンは白人として通る身体特徴をしているが、人種関係においては、自己を明確に黒人集団の一員と規定しており、この集団に対する帰属意識は強い。彼女はこの集団と生活の中にその心の根をおろしている。

クレアの手紙に接して、彼女の心に、

「屈辱と嫌悪と憤りが入り交じった。」<sup>1)</sup>

のは2年前のシカゴのクレア宅で起こった事が想起されるからである。彼女はベロウがクレアに浴びせた差別的侮辱をクレアとガートルードの「パシング」を守る必要があって、これを甘受したのであった。

彼女の屈辱感は激しく、クレアが自分の「パシング」によって生ずる寂しさに耐えかねて、彼女に再び面会の願いを持ち出して来たことが不快でならなかった。人種問題で屈辱を被った他者の苦境を軽んずるような、自己本位である人が、昔の黒人仲間達を慕い求めるなんて、信用できなかった。

「クレアは、多分、意識してやっているのではあるまいが、演技している、つまり余り意識してやってはいないのだろうが、それにはかかわりなく、演技はしている、というこれまでの疑いが再び頭を擡げた。」<sup>2)</sup>

この「演技」という言葉は、人種抑圧の中を生き抜いて来た黒人集団においては、それ特有の意味を持つ用語であって、この行為は、a節「『パ

シング』と黒人社会」で述べた、黒人文化の特徴を強く有する四つの価値規範の一つ、「適応能力」に包括されるものである。これは「仮面を被る行為」、つまり、抑圧集団のメンバーに対処する時、相手に本心を見せないことによって、相手の思惑を出し抜き、被害を未然に防いだり、これを逃れたり、またはある目的を達成するという行為を「隠し技」とすれば、これは「見せ技」と言える。この種の技能の行使は、人種抑圧や、緊急避難を前提とし、さもなくば、背信行為に陥る恐れが生ずる。

ラルフ・エリソンの小説『見えない人間』は、人種関係におけるこの「適応能力」を個人とのかかわり、つまり人間関係の中に据えて、作品のテーマの一つにしている。そこに登場する人物、財力と権力を一手に握る有力な白人達から巧みに資金を調達して黒人大学を運営するブレッドソー博士は、この「適応能力」を正しいものと信じており、白人社会を相手に、「仮面を被って」、誠に上手に「演技」する。

さて、アイリーンは昔の仲間が恋しい、寂しくて、寂しくて、というクレアの訴えを、「演技」ではあるまいか、と疑った。これは白人集団の一員となっているクレアが、黒人集団を利用して密かに個人的な利益を得る上で、白人と区別の付かない身体特徴をしているアイリーンにつけ込み、パイブ役に仕立てようと試みているのではないか、と疑ったことを意味する。クレアは黒人集団に対しても「演技」するのか、と。

夫ブライアンに、クレアが黒人社会との接触を求めて来たことを語ると、

「いつもそうなるんだよ。そうならなかった例がない。アルバート・ハモンのことを覚えているだろう、黒人の男に、連れの美人に目を向けているところを見つけられるまで、しょっちゅう七番街とレノックス街辺りやダンス場に出没したことを？ 彼等は常に戻って来るんだよ。私はそうなるのをしょっちゅう見て来たんだよ。」<sup>3)</sup>

と、「バシング」して行った者は寂しさに駆られて、こっそり戻って来るものだ、とこれを当然視しているかのように、さり気なく答える。

戻って来るのは当人の自由であろうが、このことで、アイリーンは利用されるのは御免であった。

「私は、彼女も繋がりを持っている、貧しくて、肌の色の黒い仲間達と彼女との間を結ぶ役などする気は全くないわ。」<sup>4)</sup>

と言い、夫も同意する。

ところが、手紙の返事がない、とクレアが押しかけるように訪ねて来て、黒人仲間との接触を必要とする程寂しくなった原因が、夫ペロウの黒人に対する、あの根深い差別的な態度にあったと告白されると、苦痛の原因となるものが同一であり、共感が生ずるのでクレアを拒むことができない。

クレアは夫の留守を見計らって、頻繁にレッドフィールドに家を訪ねることになり、ここを拠点にして、黒人社交界に出入りすることになる。

クレアは手紙に書き、さらにアイリーンにも直接訪ねて来て訴えた通り、黒人社会に心の慰めを求めて戻って来た。しかし、家族(家庭)生活と経済生活は白人社会で行うことを、つまり、そこで生れ、育ったところの黒人社会の生活に浸り、心を蘇らせ、生き生きとした気持になって、物的に恵まれた白人社会に戻ることを当然のこととしている。

その意味では、アイリーンが見る通り、黒人仲間を自分の心を慰める手段にしている。にも拘わらずアイリーン達がクレアを迎え入れたのは、黒人文化を特徴づける四つの価値規範のうちの、1「相互扶助」、2「他者に対する思いやり」、そして4「黒人集団に対する忠誠」の三つが諸個人の行動に働くからである。

二つの社会を行きつ戻りつすることになってしまったのだが、クレアは彼等黒人にとっては、十七、八歳の若い日に、黒人文化に生まれて身に付けた、

四つの価値規範の一つ、3「適応能力」をもとに、敵対的な白人社会に「パッシング」して行った勇敢な女性であったのだ。黒人を見捨てたことは、上述の三つの価値規範を踏みにじったことになろうが、「人種的純潔」を守るために、白人と見分けが付かない黒人が入り込むことを極度に警戒するところの白人集団の中に、勇敢に入って行って、人種主義そのものに実質的な打撃を与えたのだ。その女性が十数年を経て、心疲れて戻って来たのだ。黒人達は彼女を裏切り者とも敗北者とも見ない。血を分けた、切っても切れない繋がりを持つ仲間なのだ。その血の繋がりによって、差別という共同の敵と戦って、傷ついて戻って来たのだ。アイリーンもそのようにクレアを見ていた。

「彼女にはクレアに対する義務があった。彼女は正にこの人種集団の諸々の絆によってクレアと結び付けられていた。これらの絆は、どのようにしてその縁を切ろうとしても、クレアも断ち切ることができなかったところのものである。」<sup>5)</sup>

さて、クレアは、その心をさらけ出したアイリーンに対しても、口外しない別の目的を持って、二つの社会を往復していたようである。これは作品の終るところで、クレアが黒人グループと交わっている現場をベロウに押さえられ、「気」(nerve)、即ちちょっとした「度胸」(nerve)を失って、建物の6階の窓から墜落死するところから導き出すのだが、彼女は、ベロウを積極的に出し抜くという「危険なゲーム」をしていたようである。

彼女は母方の黒人社会に密かに戻って、そこで虚ろになった心を蘇らせ、黒人集団との心の絆を強め、また黒人と肌で接して、黒人との血の共有を自己確認し、再び密かにベロウのところへ好戦的な「パッシング」者として戻り、差別者ベロウを積極的に誑かし、出し抜くことにしていたのである。

クレアは頻繁に往復する。これが可能であるのは勿論、黒人側が共同して

クレアの秘密を守ることが一方にあるが、クレアは無職であり、有閑であること、アメリカ社会での生活が一時在留であって、白人社会での人的関係の根が浅く、行動しやすいことにある。しかも、大都市ニューヨークが舞台である。

ところで、クレアが戻って行く白人社会にはかつてのような、家族(家庭)生活と社会的生活はもはやない。

人種問題でクレアの側からは、夫との心の関係は切れている。愛娘マージャーリーはスイスにいるが、心の悩みを訴え得る年ではあるまい。白人社会に在るであろうクレアの友達に打ち明けるには「パシング」露呈の危険がある。クレアには白人社会に親友はいなかったようである。

二つの社会のうち、いずれの方にクレアの心が結び付くか想像がつかう。社会と結び付くのはその社会の集団を作る人を通してである。クレアはアイリーンと、アイリーンよりも男性と、男性の中でも皮肉なことにアイリーンの夫ブライアンと親密になる。アイリーンの家庭が危うくなる気配が強まる。

アイリーンはクレアの訪問をできる限り控えさせようと別の目的で尽力しなければならなくなる。

「パシング」露呈による愛娘との離別が、クレアの最も恐れるところである。アイリーンはこの点を強調してクレアの訪問を阻止しようと試みるが、クレアにはベロウを積極的に出し抜く目的があるので応じない。彼女は頭脳を働かして、用心深く行動しており、この面での才能には揺がぬ自負心がある。行動期間も長くはない。アメリカ滞在期間は約6カ月、すでに12月に入っており、残すところ3カ月。手抜かりなくやり遂げて出国する気である。

ところで、黒人社会との人間味豊かな接触が続くと、クレアはこの社会で暮らすことも念頭に置き始めたようでもある。クレアはたびかさなるアイリーンの忠告に対して、万一露見すれば、離婚して自由の身になり、ハー

ムに移り住んで自由奔放に暮らす、と言明する。彼女には相手を出し抜く才能があるから、マージャリーをペロウの手から奪い返すこともできよう。彼がクレアを離縁する理由は黒人の血縁者であるためだが、それはマージャリーの追放をも必要とさせる。何故なら娘の母方の祖母は黒人だから。

アイリーンはクレアの言明を聞いて驚く。「パシング」露呈による離婚の覚悟に対してでなく、クレアが自由の身になることに不安を覚えたのであった。彼女がアイリーンの手から夫ブライアンを奪うのではないかと恐れたのだ。

彼女はクレアの言明を聞く以前、彼女の家庭生活を妨げ始めたクレアの訪問を阻止するために、何らかの方法でクレアのハーレム訪問を通知することを思い付く。この考えは、彼女の「黒人集団に対する忠誠」と葛藤を生じさせた。「パシング」しているとは言え、クレアは彼女にとって黒人集団の一員である。

「彼女は二つのものに対して働くところの忠誠心の間に挟まれてしまった。個人と集団とに異なってはいるが、結局は同じもの、自分自身と自分が帰属する集団との双方に働く忠誠心の間に。」<sup>6)</sup>

彼女にはクレアを裏切る行為は自己を裏切る行為と等しいものであった。

「アイリーン・レッドフィールドは、生れて初めて、自分は黒人に生れなければよかったのに、と思った。彼女は黒人としての責務を無視できないが故に、生れて初めて、苦しみ悶えるのであった。彼女は、人種集団のことで思い悩まずとも、女として、また自分一人のことで、一人の人間として悩むだけで沢山だ、と心の中に叫ぶのであった。」<sup>7)</sup>

彼女は夫ブライアンをどんなことがあっても離すまい、と誓い、クレアが

ペロウと共に無事に出国して行くであろう春三月の到来をひたすら待ち望むことになる。

クリスマスが近い日、ニューヨークの街に吹雪が走る。アイリーンは親友のフェリス・フリーランドと腕組みして、身を寄せ合って街角を曲り、一人の白人紳士とぶつかる。御免！と言って笑いながら顔を上げると、その人はクレアの夫ペロウ氏であった。彼は心からにこやかに、レッドフィールド夫人！と呼んで帽子を取り、手を差し延べる。ところがその笑顔は直ぐに消えてしまう。

「驚き、疑念、ついで、分かった、という表情なのであろうか？ そのような反応が彼の顔に次々に現われては消えて行った。」<sup>8)</sup>

アイリーンが腕組みしている女性が混血黒人であるのが原因であった。もう一度アイリーンを見た彼の表情には不快の念がありありと現われていた。レッドフィールド夫人が「バシング」可能な黒人と知ったのであろう、嫌悪の表情もあらわに呆然と立ち尽すペロウ。黒人を忌み嫌うこの一白人の男に軽蔑の一瞥を投げかけ、アイリーンはフェリスを引っばるようにして立ち去った。ペロウが黒人と連れ立っているアイリーンをどう考えようと、それは彼女の関知しないことであった。

翌日、マンションの6階にあるデイヴ・フリーランド宅でパーティが催される。クレアは、夫がニューヨーク市に戻って来ているとの理由で、このパーティは参加しないことになっている。

ところが、クレアは正装してやって来る。夫ペロウは急用で、フィラデルフィア市に出張したと言うのである。これはペロウが仕掛けた罠であるのをクレアは見破れない。アイリーンが参加を取りやめるように主張しても応じ

ない。初めて、アイリーン宅を訪問した日、拒む彼女を押し切ってそのまま、黒人福祉連盟主催のダンス・パーティに、強引に参加したように。

パーティの最中、一人の白人の男が入り込んで来る。それはペロウ。

『『そうだったのか、お前は黒奴<sup>ネガー</sup>だったのか、呪われの、汚れ黒ん坊だったのか！』彼の声は怒りと苦悩で呻くようであった。』<sup>9)</sup>

部屋は熱気を抜くために、大窓が床に近い窓枠のところから上に広く押し開かれている。ペロウが踏み込んだ時、クレアは窓際に立っていた。彼女は落ち着いていて、口もとには薄ら笑いすら浮かんでいた。ペロウが迫る。

「気をつけるがいいわ。あんた、ここではたった一人の白人なのよ。」<sup>10)</sup>

とフェリスがペロウに警告する。アイリーンがクレアのもとへ駆けよる。と殆ど同時に、クレアは後ろ向きに崩れるように倒れ、窓の外に消える。

彼女は短い期間であったが、「適応能力」を発揮して、差別者ペロウを積極的に出し抜くために、黒人社会との接触を深めた。それは、夫でありながら、偏狭な人種差別者として、妻クレアの心を虚ろにして、絶望の淵に追いやったペロウに対する、彼女の正に私的な報復の戦いであった。そこにはアイリーンが秘めるような黒人集団に対する責務はなく、また、クレア自身が、過去十数年に亙って勇敢に維持していた（それは他者の自由を尊重し、これを侵害しないが故に普遍性が備わるのだが）、一個人の自由を守り抜くための個人主義も全く見られなかった。彼女の行動を支えていたのは、「パッシング」する上で必要なものはこれだ、とかつて彼女がアイリーンに語ったところの（それは2章『『パッシング』に対する二人の見解』で述べたが）、「ちょっとした度胸」であった。彼女の行動は、ラングストン・ヒューズの言うような、「危険なゲーム」として展開されていたようである。ペロウの罨

にかかって、このゲームは失敗した。しかし、決して死を招いたのではない。気を失って、前に倒れなかっただけである。床に倒れて意識が回復すれば、彼女にはハーレムで暮らす自由の道が開けるのだった。

ペロウは怒りと苦惱で呻くだけでは終わらない。彼は正に、身につけたその根深い人種偏見によって、人生そのものに敗北したのだ。彼の人生は人種偏見を捨てない限り、回復の道はない。彼にはクレアとの間にもうけた娘、マージャリーが存在する。この娘を拒否すれば、それは正にペロウ自身を否認することになる。何故なら、マージャリーはペロウの子なのだから。

クレアが気を失って偶然にも窓の外に倒れ落ち、この世に存在しない事と家庭に戻るであろう平和の実感とが結び付くや、アイリーンの意識はもうろうとなって行く。

人種の敵対者ペロウに対して展開されたクレアの私的行動は、アイリーンとその家庭を利用して行われた。それが可能であったのは、アイリーンがクレアを黒人集団の一人として認識し、その擁護を義務と感じていたからだ。しかし、これは、アイリーン・レッドフィールドとその家庭の、自由である権利と幸せを求める権利を侵害するものであった。クレアの偶然の死によって、アイリーンは自由と平和を回復したのだった。

〔注〕

- 1) Nella Larsen, *Passing* (Arno Press and The New York Times, 1969), p. 9.
- 2) *Ibid.*, p. 89.
- 3) *Ibid.*, p. 96.
- 4) *Ibid.*, p. 97.
- 5) *Ibid.*, p. 90.
- 6) *Ibid.*, p. 180.
- 7) *Ibid.*, p. 181.
- 8) *Ibid.*, pp. 182, 183.
- 9) 10) *Ibid.*, p. 208.